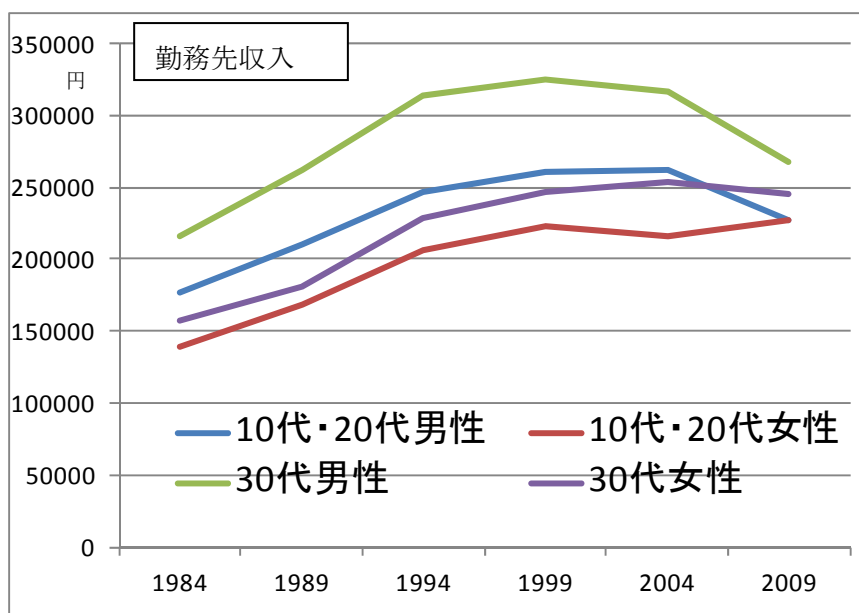


『全国消費実態調査』の単身世帯票から、世代ごとに男女間の相違に着目して経年変化を見てみた。なおここで示す数値は、重みづけ前の数値であり暫定的な数値である。



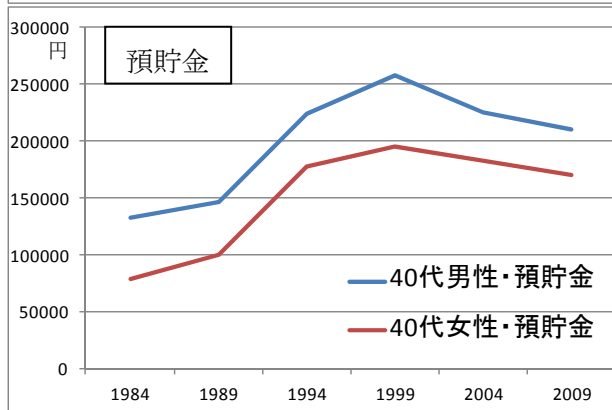
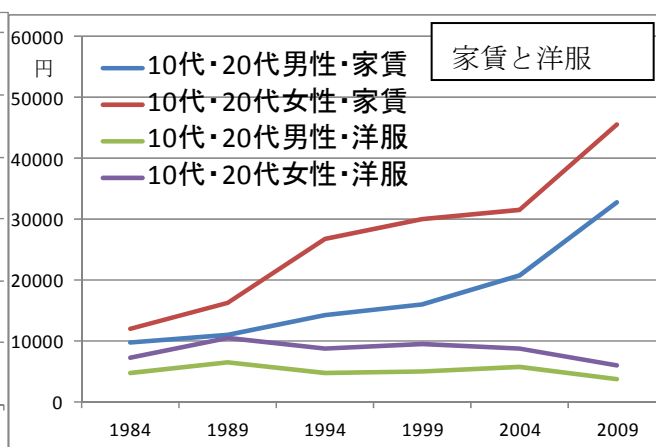
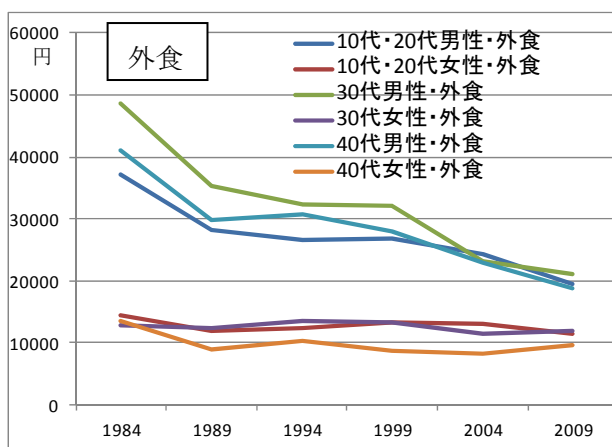
・勤務先収入は、1984年～2004年までの20年間、今回分析した10代・20代、30代、40代の全世代で男女差が顕著であったが、直近の2009年調査の値では、10代・20代と30代で統計的に男女間の有意差が消えた。

→男性では、10代・20代30代の勤務先収入が、山なりになっている。つまり近年勤務先収入額が減少傾向にある。

→それに対して、女性の勤務先

収入額は、多少の増減はあるものの1994年の水準を維持している。

・1984年から2009年までの25年間、一貫して男女差が顕著なのは、10代・20代では外食、家賃、洋服、30代では外食、40代では外食、預貯金であった。



→男性の外食への支出は年々減少傾向にある。対して女性の外食への支出は、89年以降減りこそすれ小幅な減少にとどまっている。

→男女ともに10代・20代の家賃支出は、年々増加の一途であるが、とりわけ女性の家賃支出が著しい。

→10代・20代の洋服への支出は額として小さいが、一貫して男性よりも女性の支出が高い。

→40代男性の預貯金額は、1999年以降劇的に減少している（おおむね5万円）。それに対して40代女

性の預貯金額も1999年以降減少はしているものの小幅な減少にとどまっている。